

第19回まほろばウォーキング大会



大和っ子スクール

2月4日(土)大和村大榎福元益地(実証農園)にて、大和っ子スクール「林業体験」を開催しました。内容は椎茸の原木栽培とし講師には、役場産業振興課の高梨七海さんを迎え、村内の各小学校1年生から6年生の11名が参加しました。始めに椎茸についての講話を行い、その後、シイの木にドリルで穴をあけ、椎茸の駒を打ち込みました。実際にドリルを動かすと怖がる児童もいる中、祖父や父の畑仕事の手伝いの一環で経験があるのか、上手に使う児童もいました。

令和5年1月29日(日)に奄美フォレストボリスで、第19回まほろば大和ウォーキング大会を開催しました。

3年ぶりの開催となった今回は、前日まで悪天候や厳しい寒さが続き、開催が心配されましたが、当日は、太陽が顔をのぞかせる好天気にもぐまれて開催することが出来ました。村内外から家族連れをはじめ、783名の方が参加され、フォレストボリスの自然や、整備された水辺の広場などを歩きました。



(林業体験：椎茸の駒打ち)

次回、実施する際に今回植えた駒からたくさん椎茸が育つ事を願っています。

令和5年度の公民館講座申し込み開始!

新年度の公民館講座の申し込み受付を3月13日から開始します。新年度から新たな講座も開設の予定です。詳しい内容につきましては、中央公民館 57-2311までお問い合わせ下さい。

令和4年度大和村PTA研究大会

令和5年2月5日(日)に第46回大和村PTA研究大会が大和村防災センターで行われました。講演では、日本心理学会認定心理士の南澤響子さんが「言葉の力」演題で講話し、「親が普段口にしてる言葉が子供に自己肯定感の左右する」事など、言葉の掛け方のアドバイスを話されました。



大和村の郷土教育について(指導主事：前田剛)

みなさん、大和村のよさといわれて何を思い浮かべますか? 宮古崎や国直海岸、フォレストボリス等の観光地やすもも、タンカン等の食べ物、アマミノクロウサギ等の動植物を含めた自然環境等いろいろあると思います。しかし、大和村で暮らしていると、そのよさが当たり前となってしまっているのではないのでしょうか。子供たちに聞いてみると、知ってはいるけど行ったことはない場所が多かったり、直川智翁の功績など大和村について意外と知らないことが多かったです。また、「大和村は好きですか」という質問事項に対して、96%の子供が好きであると答えましたが、「将来大和村で暮らしたいですか」という質問には、「暮らしたい」と答えた子供は59%でした。そこで、よりよい郷土づくりに向けて積極的に行動する人材育成が必要であると考え、「大和の名を誇りに思う教育」を進めることとしました。郷土素材を改めて見つめ直し、学習の素材として活用することで、これまで当たり前と思っていた大和村のよさを価値付け、体験活動等を通してそのよさを感じ取らせるようにしました。集合学習や各学校での体験活動、振り返り活動により、子供たちは体験等から学んだことを知識として体得していきました。そこには、役場各課の皆様の協力もあり、ゲストティーチャーとして学校に出向いてくださったり、見学学習で子供たちの質問に答えてくださったり、子供たちのアイデアを地域商品券等に活用してくださったりと、皆様の御協力に感謝しております。このような活動を通して、「将来大和村で暮らしたいですか」という質問に、「暮らしたい」と答えた子供は84%まで上昇しました。また、「郷土をよくするために何をすべきか考えることがありますか」「今住んでいる地域の行事に参加していますか」という質問事項では、あてはまると答えた子供が県や全国の数値の2倍になっており、大和の名を誇りに思う教育が浸透したことを示しています。この研究を通して学んだことは「足元を見つめること」の大切さです。大和村のよさについて教師が改めて見つめ直し子供たちに指導することで、これまで当たり前とっていたことがどれだけ素晴らしいことなのか子供たちに気付かせることができました。大和村のよさに気付かせることで、子供たちは「大和の名を誇り」に思うようになったのではないかと思います。今後も大和村のよさを子供たちに伝え、二十歳の集いで多くの参加者が述べていたように、将来大和村に帰ってきたい、大和村のために自分ができることをがんばりたいと思うことができるような子供たちを育てていければと思っています。



中山昭二兄いの四方山話(よもやまぼな)

ジビエ料理

近年、農作地を荒らす動物や、外来種の動物などを捕獲し、処分するのではなく調理して美味しく食することをテレビで目にします。外来種の動物が増えたのは、外国からペットとして持ち込まれたりしたこと等が原因で、人間の身勝手な行動で生息地が広がり駆除されており、かわいそうな気持ちにもなります。私たちが子供時代の昭和30年代はジビエ料理などという上品な言葉はなく、普通にいろんなものを食べていました。当時の海、山、川の獲物は、大人になった今では食べることはとてもできないものが多くあります。海のものではミョウビユ(みのかさご)イシヨマジムン(うみへび)以外はほとんど食べています。里山ではヒユースイ(ひよどり)タハアドリ(しろはら)オーハトゥ(すあかあおぼと)シーギャ(あまみやましぎ)などは中学生が自作のワナ(はっきやんま)で捕獲した野鳥をよく食べた思い出があり、オットンピキ(おとんとん)などは焼いたら美味しかったものです。クロウサギも婦人病に良いとの俗説があり、家族で食べた思い出があります。私自身は1度食べた記憶がはっきりとあるのです。母親は「お前は2度食べている」と言われます。川のものでおいしい思い出があるのはクルウブ(みなみぼうずはぜ)です。津名久集落の奥のキョウゴ(清川)に生息するクルウブは、大きくて親指ほどの形をしており、砂糖醤油で甘辛く煮ると魚の甘露煮と似ており懐かしい味を思い出します。子供のころ隣のおじさんは実家の住用川内集落へ山道を歩いて里帰りして、帰りはオットンピキやクルウブをおみやげに頂いていました。(清川の山を越えると住用の川内集落へ着きます。)罪のない小動物を多く食べているので、今ではあの頃の罪滅ぼしの気持ちが優しく見守っています。